



まだ携帯のない頃、高校生40人を引率して雌阿寒岳登山をした時の体験です。早朝に出発し、山頂で日の出を見えるという予定もあいにくの雨。天候が回復した屋過ぎに登山開始。全体のコースタイムは3時間半。山を挟んで反対側の登山口から入山し、夕食前に我々のいるキャンプ場登山口へ直接下山する楽な計画でした。しかし、登頂にかかったのが3時間。それでもまだ時間にゆとりがありました。ところが下山を始めて中腹にさ



しかかった頃、褐色の濃霧がどんよりと行く手を阻みます。火山性ガス。一息吸うだけで気絶しそうな濃度です。一時間以上待機するも、ガスはコースに停滞したまま。やむなく引き返す決断をし、再び山頂を目指しました。山頂付近に来たときには真つ暗。ライトを消すと、数センチ先も見えない完全な暗闇です。そして冷たい雨。周りはコースなど分からないガレ場。冷静を装ってはいたものの、パニックになりそうな自分を高校生に気取られぬよう必死でした。真つ暗闇の山頂で、向かうべき方向も分からず雨の中40人の高校生をどう導くのか。無線をとおして下界の待機組とつながっていました。しかし、それ



「怖れるな、

私はあなたと共にいる」

学校法人 北海道カトリック学園 理事長 勝谷 太治

自体は何の助けにもなりません。その時私の心は自然に下界ではなく天に向かって「CQ、CQ」(だれか答えてくださいという無線の呼び出し符号)。必死に祈り始めていました。当然、言葉に出さず心の中で。程なく「怖れるな。私はあなたと共にいる。」という応答が天から聞こえてきた。と思えるほどはつきりと不安と恐怖感が消えていったのです。神とつながっている。この確信は私を極めて冷静に事態に対処できるようにしてくれました。高校生には雨具はもちろん防寒具、非常食、そして、早朝登山の為のライトを携行させていました。一カ所に集まって点呼をとり、そこから男子高校生が岩に赤く書かれた矢印を探しに八方に散る。見つけたら大声で叫び全員がそこに集合

し点呼をとる。これを繰り返して山頂のガレ場を脱出しました。コースに出てからは、男女交互になつて助け合い、途中非常食を分け合いながら夜10時過ぎに無事下山したのです。

神とつながっているという確信は、神の奇跡をもって助けられることを待つのではなく、困難なかでも冷静さを保ち今ある条件の中で最善の選択ができるようになること。そのように神は私たちを助けてくださるのだとこのとき理解したのです。

小さな経験の積み重ねが

人への信頼、自分への信頼を育む

藤女子大学人間生活学部保育学科 教授 高橋 真由美



前回、前々回のシャロームでは、これからは「何が起こるかかわからない世の中」とされていて、それに対応すべく、日本の教育では「答えがみつからない問題に向き合い、みんなで解決していく力」を育むことが目指されていることに触れました。その力を具体的に挙げるとすれば、様々な情報から世の中で起きていることを的確にとらえる姿勢、多様な価値観を受け入れ、みんなにとって一番良い方法を探る柔軟な考え方、自分の考えを相手に伝える力、他人と円滑に人間関係を構築する力などです。

ここで気付くことは、「他者と協働する力」「他者との関係性を結ぶ力」が大切であるということです。では、他者と関係性を結び協働する力の基礎は何でしょうか。それは、自分是他者から大切にされている存在であることを実感することかと思えます。自分を大切にもらうことが他者への信頼となり、他者への信頼が関係性を結ぶことや協働して何かに向かう気持ちを持つことにつながるのではないのでしょうか。私は、



以前、泣いている3歳児のAちゃんに対して何とかして泣き止ませようとする同じクラスの3人の子どもの様子を見かけたことがありました。泣いているAちゃんに対して、Bちゃんは「どうしたの?」と聞きます。「ママとバイバイしなかった」とAちゃんが答えると、Bちゃんが「ママはあとで来

るよ、Bちゃん達と一緒に遊んでいたら悲しくなくなるよ」と言います。それを聞いたCちゃんは「あのね、心の中でね、悲しいのをなくすの」、Dくんは「廊下にいたら寒いよ」と、それぞれAちゃんに声をかけます。それでも泣き止まないAちゃんにBちゃんは手にもつていた塗り絵を見せて、「ね、Aちゃん、昨日これ一緒にしたでしょ?また一緒にしよう」とAちゃんを誘いました。CちゃんとDくんもそれぞれ「一緒に楽しいよ」「お弁当も一緒にだよね」等と言っています。3歳児なりに自分の知っている言葉を使って友達の気持ちに何とかして寄り添おうと一生懸命な友達のかかわりに触れ、Aちゃんの表情が少しやわらぎました。

自分は大切な存在であることの実感を得る経験は特別なものでありません。この事例のような小さなやさしさを受け取る経験の積み重ねが大切なのだと思います。このような経験の積み重ねができる世界を子ども達に保障することが私達大人の役割なのではないでしょうか。

言葉で伝える

認定こども園俱知安藤幼稚園
保護者 新林 晴美

今年の春に入園した年少の息子が、突然「ありがとう」と言うようになり驚き。その数日後、私が息子に「お手伝いしてくれてありがとう」と言うと「どういたしまして」と返事が。こういう時はこう言うんだよ、と半ば言わされていた言葉を、自然に伝えるようになったのでした。



息子は集団生活の経験もなく、コロナ禍の外出自粛などで同年代

のお友達との関わりも希薄でした。恥ずかしがり屋で、見通しがきかないと不安になる性格。毎日登園できるのか心配でしたが、一緒に通う姉がお世話をしてくれ、玄関では先生が優しく手を引いてくれます。息子はその日あった事を一生懸命伝えようとしてくれますが、すべてが初めての体験でそれが何だったのか名前が出てこないこともしばしば。そんな時は、一緒に園のブログを見て思い出し、色んなお話をしてくれます。送迎時には先生から園での様子を教えて頂き、私の知らない子供たちの一面に驚くこともあります。

時には休園や活動が制限される中、今できることを模索し子供たちが安心して過ごせる場や環境を整えて下さる園・先生方に感謝しています。子供たちは気持ちは同じようで、「今日、先生にありがとうしてきたよ」と話しています。



広島天使幼稚園

こちらこそありがとう

教務主任 五十嵐 幸子

日々の保育を積み重ねている中で時々忘れぬ場面に出会うことがあります。天使幼稚園に勤め3年目のある日。カラーブロックを使って遊んでいる子達がいきました。様子を見ていたのですが、並べるだけでは満足しなかったようで「先生一緒に遊ぼう」と誘われ「何作る?」「おうち?」等と言いながらブロックを縦に積んで少し高いお家を一緒に作り始めました。「お城を作ろう!」その内私が手伝わなくても自分達でどんどんお城が出来ていき、私は違う遊びをしていた子ども達に呼ばれその場を離れました。片付け後、カラーブロックで遊んでいた女の子が私のところへやってきました。私はてっきり「なんで途中でいなくなっちゃったの?」と言われるのかなと思ったのですが違いました。「先生、お城作ってくれてありがとう。とっても楽しかった。」とわざわざ言いに来てくれたのです。「先生こそありがとうだよ。そう言ってくれて嬉しいよ。」このお話をお伝えしたところ、お母様も涙ぐんでおられました。10年以上たった今でも心が温かくなる大切な思い出です。これからも忘れぬ出来事や喜びの積み重ねを大切に日々の保育を行っていききたいと思います。



カトリック聖園こどもの家

マリア様のころ

保育教諭 湯佐 美咲都

新緑が美しく、様々な自然を身近に感じられる季節となりました。登園してくる子どもたちは、公園で見つけた木の実やカエデの葉などを大切に持ってきて、マリア様とイエス様にそっと捧げています。

5月はマリア様の月。5月30日には教会に行きマリア様に花を捧げる「マリア様のお祝い」がありました。5月に入ってからすぐ、お祝いに向けて子どもたちと共にマリア様のような優しい心で過ごせるようにお祈りをする中で、「マリア様のような優しい心」とはどのような心なのかを考えました。子どもたちからは、「困っているお友だちを助ける」「おもちゃを貸してあげる」などと声が上がります。ある日のこと、1人の女の子が私の元に駆け寄り、「〇〇ちゃんがこのおもちゃを貸してくれたの。マリア様みたいだね!」と教えてくれました。また、マリア様の心はサファイアのように美しい心であると聞き、「僕のお胸にもサファイアあるかなあ」と話す子もいました。お友だちの優しさに気づき感謝することができた1カ月、マリア様の存在をより身近に感じた1カ月でした。これからもマリア様に見守られながら、感謝する心や思いやる心を大切に過ごしていきたいです。



長沼カトリック聖心幼稚園

私たちに寄り添ってくださる神様

教諭 西村 栄美

「おはようございます」園舎の前でみんなを優しく迎えてくれるマリア様。子どもたちも立ち止まりマリア様にご挨拶をします。玄関に入り先生たちにもご挨拶。そして、またマリア様が皆を迎え入れてくれます。子どもたちは神様を身近に感じ愛され守られていることを感じ幼稚園の一日が始まります。

「5月はマリア様の月」。「マリア様のころ」の聖歌を歌いながら、みんなに寄り添ってくれるマリア様の心を感じた子どもたち。あるクラスでは、年長さんが中心となりみんなで話し合い、マリア様、鶯、やまゆりのちぎり絵を仕上げました。飾られた絵を嬉しそうに見つめ心を込めて歌う子どもたちの姿がみられました。

週1回あるお集まりでは、先生たちから神様のお話を聞きます。先生たちはスライドや絵、歌を引用し子どもたちに分かりやすくお話しします。時には天使に変装し子どもたちに語りかけます。子どもたちは、日々の生活と照らし合わせ、自然のお恵みに感謝し周りの人や自分を大切にすることを育んでいます。

お祈りで始まり、お祈りで終わる毎日の保育を通して子どもたち一人ひとりに生きる基本となる優しさ、愛、助け合い許し合う心が育ってほしいと思っています。

笑顔いっぱい

さゆり幼稚園

登降園の関わり

教諭 吉田 桃子

さゆり幼稚園は送迎バスがない幼稚園のため、毎日保護者の方が幼稚園まで送り迎えをしています。そのため「今日は運動会の練習を一生懸命頑張っていましたよ!」「苦手な野菜を頑張って食べることができたんですよ!」などその日の様子を直接伝えることができます。話を聞いて、少し恥ずかしそうにしていたり、誇らしげな表情をしている子どもたちの姿を見て、ほっこりすることも。子どもの成長や、面白かった・可愛かったエピソードなどを保護者の方と共有できる楽しい時間です。時には、ご家庭での様子や「今日は行きたくないな」「この活動は苦手だな」といった家族には言える本音を聞くことができたり、園での様子や成長に合わせて頑張ってもらいたいことを情報共有させていただくこともあります。その時間を通して、子どもの姿をより捉えることができ、保育に活かしていくことができます。ここ1、2年はコロナ禍ということで、

例年のように幼稚園に集まる機会を持つことが難しいのが現状です。ですが、その中でも毎日少しでもお話できる送迎の時間を大切にしながら、これからもそれぞれの子どものより良い援助ができるよう努めていきたいと思っています。

